第５章　７区の調査

第１節　調査区の概要

７区は出雲市日下町に所在し、高浜川の北側で、鍛冶屋谷川の西岸から約 200 m西側までを範囲としている。遺跡の現況は水田で、地表面の標高は約４m である。

７区の調査は、平成 16 年度に７区①が発掘されたのを皮切りとする。その後、平成 20 年度に７区②・③・④、平成 21 年度に７区⑤、22 年度に７区⑥の発掘調査が行われた。これらの調査のうち、７区①については平成 20 年３月に、７区②・③については平成 22 年３月に発掘調査報告書が刊行されており、７区①では古墳時代中期から後期の溝や土坑、井戸などが、７区②・③では古墳時代中期の溝や、古代の畦状遺構などが報告されている。本報告書では、７区④・⑤・⑥について報告を行う。

調査グリッドの設定（第 134 図）　７区④・⑤・⑥では、調査にあたって日本測地系の第Ⅲ座標系に基づき座標軸を合わせた 10 m四方のグリッドを設定している。X＝ -67,190、Y＝ 54,320 を原点とし、北に向けてアルファベット順、東に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は各交点の南西隅を持ってグリッド名称とし、これに基づいて遺物の取り上げ等を行った。

７区④　平成 20 年９月８日～ 12 月 10 日にかけて調査を実施した。弥生時代後期～古代の遺物が出土しており、遺構は弥生時代後期後葉～末頃の流路跡や、古墳時代の前期の溝などが確認されたが、総じて遺物・遺構は少なく、遺跡の西端の様相を示すものと考えられる。

７区⑤　平成 21 年５月 27 日～ 11 月 25 日にかけて調査を実施した。遺構として面的に確認することはできなかったが、調査区壁面の土層から黒色腐植土層下面で畦畔状の高まりが観察された。

シルト層上面では古墳時代中期の溝や落ち込み状の地形を検出しており、溝のひとつは７区③の溝と連続することが明らかになった。落ち込みでは古墳時代中期を中心とする遺物が多く出土している。

下層のシルト層の調査では弥生時代前期～後期末頃までの土器を検出した。量的には後期後葉～末頃のものが多く、後期後葉の土器が一括性の高い状態で出土した地点もあった。

７区⑥　平成 22 年６月７日～ 11 月 24 日にかけて調査を実施した。黒色腐植土層下面で畦畔状遺構２条を検出しており、古代末には水田が営まれたと推測される。

シルト層上面では、７区⑤で確認した落ち込みの続きや溝などを確認しているが、シルト層上面のレベルは西側へ行くほど低く、落ち込みの肩は不明確になり、遺物も７区⑤と比べて乏しい。

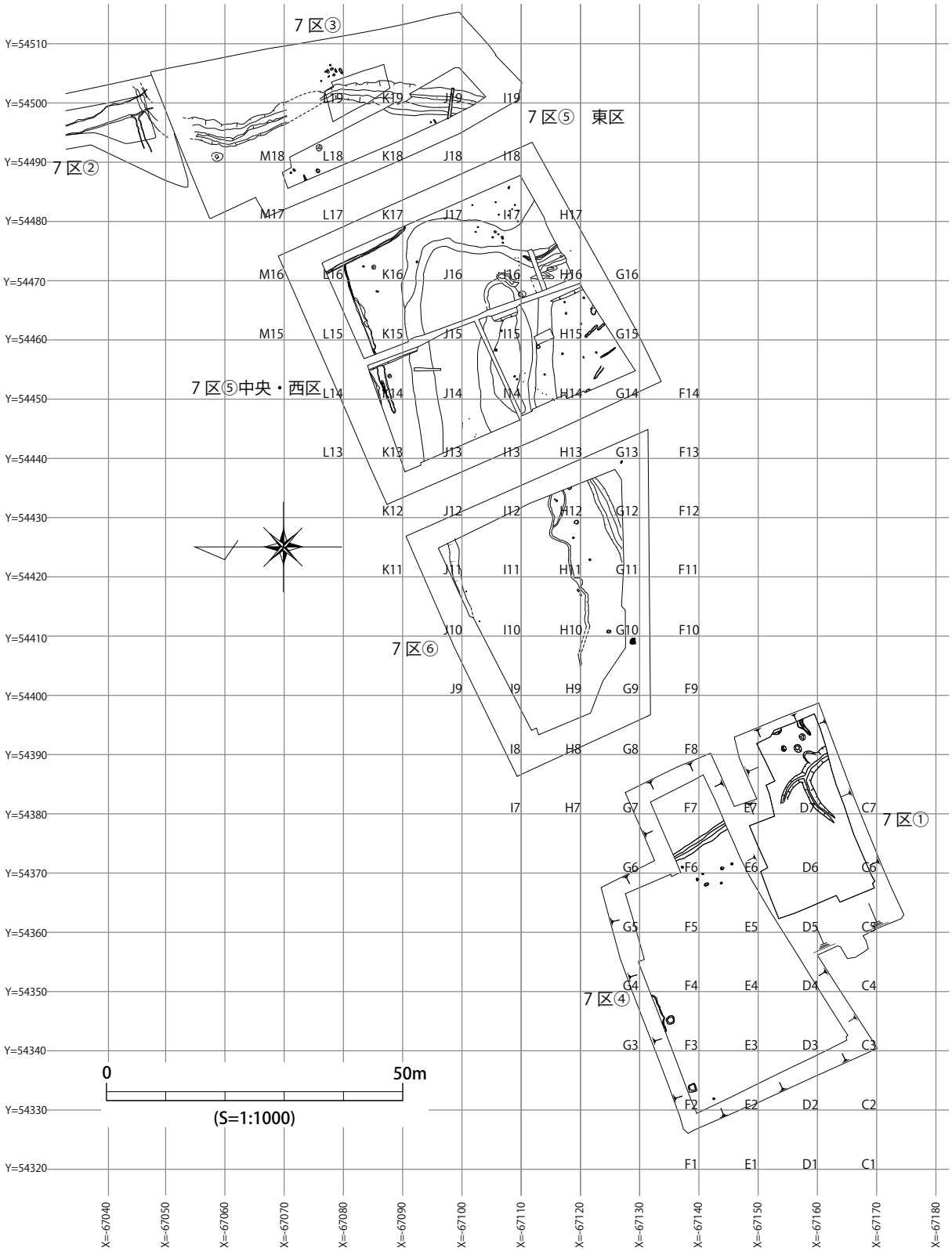
シルト層を掘削したところ、弥生時代後期中葉の遺物を含む河道跡が検出された。

第２節　７区④の調査

１．調査の経過

７区④は、７区①の北側に設定した調査区で、山持遺跡で最も西側に位置する。平成 20 年度に 1,510㎡を発掘調査した。

６区⑧の調査終了後、平成 20 年８月 26 日から重機により水田耕作土と黒色腐植土層を除去し、９月８日から人力による遺物包含層の掘削を開始した。10 月中旬ごろから灰色シルト層上面において遺構検出作業も行うようになったが、遺構は少なく、溝２条と土坑２基、性格不明のピット



第 134 図　山持遺跡 7 区調査区地区割り図

が確認されたのみであった。11 月上旬には遺構を完掘して、これらの記録を終え、11 月 13 日にラジコンヘリコプターで空中写真撮影を行った。

その後、調査区東側の北壁面から流路跡と思われるような土層が観察できるものの、平面プランが確認できなかったため、調査区東側の 300㎡で灰色シルト層を掘り下げ、遺構の検出を行うとともに、下層における遺物の有無を確認することとした。

発掘の結果、２か所の流路跡（SR01・02）と溝１条を検出し、土層断面の検討から SR01・02 についてはシルト層上面から掘り込まれていること、SR01 は本来は３条の流路跡が重複したものであること、SR01 に杭列が伴うことがわかった。12 月 10 日にこれらの記録や、杭の取り上げを終え、調査を終了した。

２．基本層序（第 136・137 図）

調査区の基本層序は大きく見て次の５つに大別した。

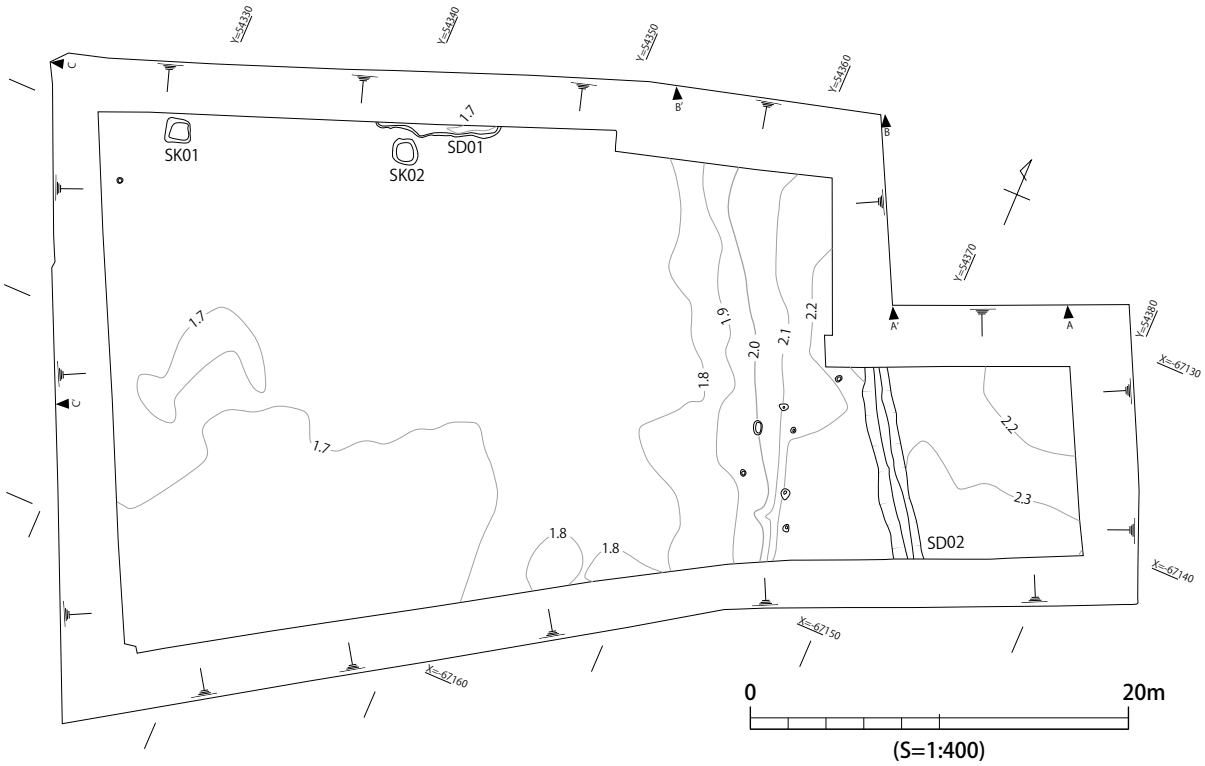
Ⅰ層は、水田耕作土など近世以降に堆積したと考えられる層である。このうち第 136・137 図のⅠ - ５層は河川の氾濫よって堆積した細砂層で、他の調査区でも同様の層が認められる。

Ⅱ層は、未分解の植物質のものが堆積した黒色系の腐植土層で、「オモカス層」と呼ばれるものである。この層も他の調査区と同様に認められるもので、本調査区では 30 ～ 40㎝の厚さで堆積している。

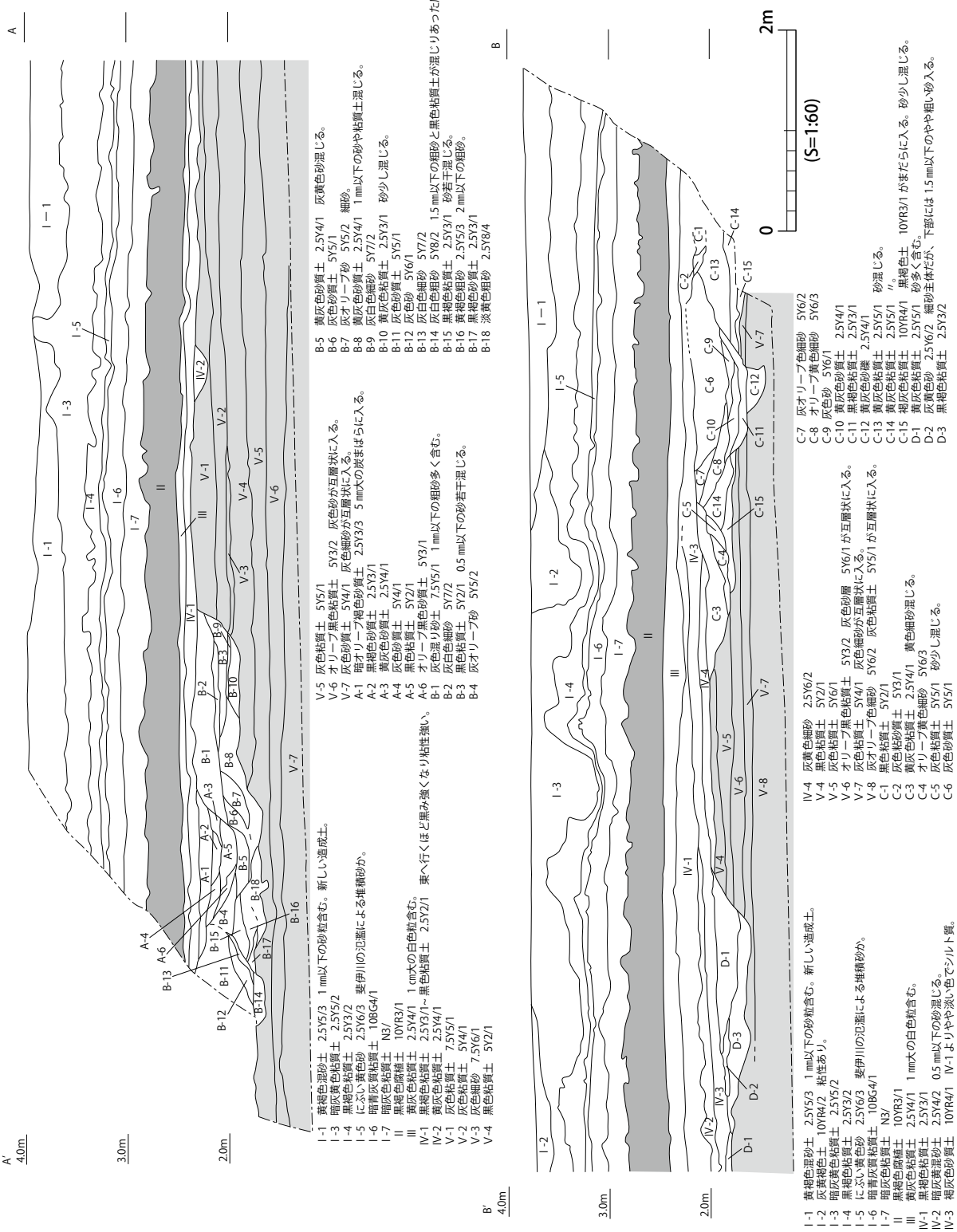
Ⅲ層は、Ⅳ層と比べやや灰色みを帯びた粘質土層で、径１㎝大の白色～黄褐色の砂質土粒塊を含んでいる。古代の耕作土と考えられる層で、須恵器片などが少量ながら出土している。調査区東側では５cm ～ 10㎝程度の厚みであるが、西側では 20 ～ 30㎝と堆積が厚くなっている

Ⅳ層は黒色系の粘質土層で、主に古墳時代の遺物が出土している。調査区東側では 10㎝程度の厚みであるが、西側では約 40㎝の堆積がみられる。

Ⅴ層は灰色のシルト系堆積層で、前述したようにこの上面で遺構を検出している。調査区東側や調査区周囲の排水溝でこの層を掘削しているが、遺物はほとんどなく、この地点においてはシルト層の堆積段階では人間の活動は活発でなかったと推測できる。



第 135 図　７区④Ⅴ層上面遺構図

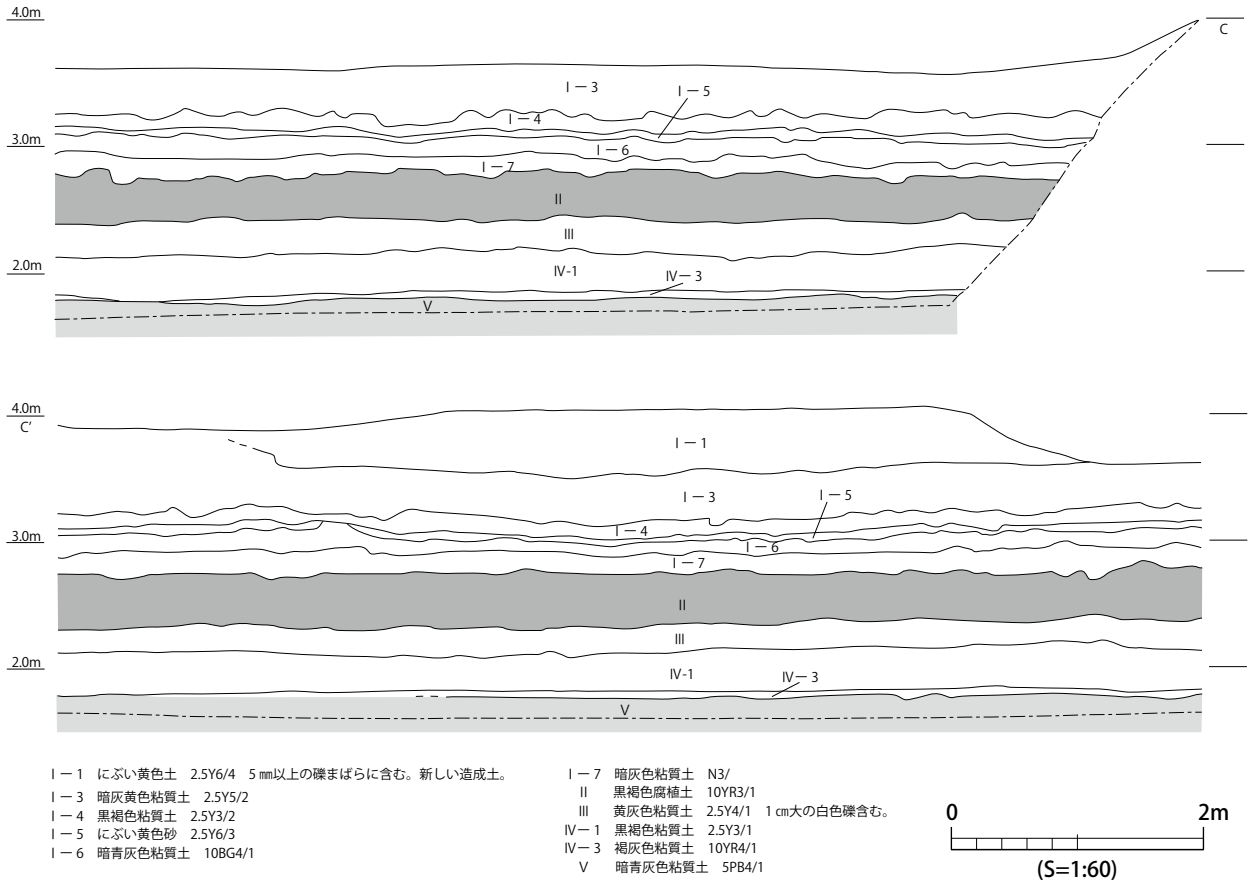


第 136 図　7 区④北壁（A-A'・B-B'）土層断面図

3．Ⅲ層の調査（第 138 図）

本調査区ではⅢ層から遺物包含層とみなして人力の掘削を行い、出土遺物の取り上げている。Ⅲ層では古代の須恵器や土師器、木製品が少量ながら出土している。なお、Ⅲ層上面とⅢ層下面（Ⅳ層上面）では、遺構の埋土と基盤層の判別は困難とみて、遺構の検出作業は行っていない。

出土遺物（第 138 図）　1 ～ 4 は古代の須恵器である。1 は高台付坏で、高台は底部の周縁よりも



第 137 図　７区④西壁（C-C'）土層断面図

内側に接合されている。出雲ⅣＡ期に位置付けられよう。２は皿で体部から口縁部は外反しながら立ち上がるものである。３・４は甕の胴部片で、外面に平行タタキ目、内面に同心円当具痕が見られる。

５は古代の土師器坏で、体部が直線的に立ち上がるものである。口径は 12.2㎝、底径は 8.2㎝、器高は 3.4㎝である。底部外面には板状のものによる圧痕が観察され、底部内面には「𤭖」と墨書されている。時期は 10 世紀頃のものと推定する。

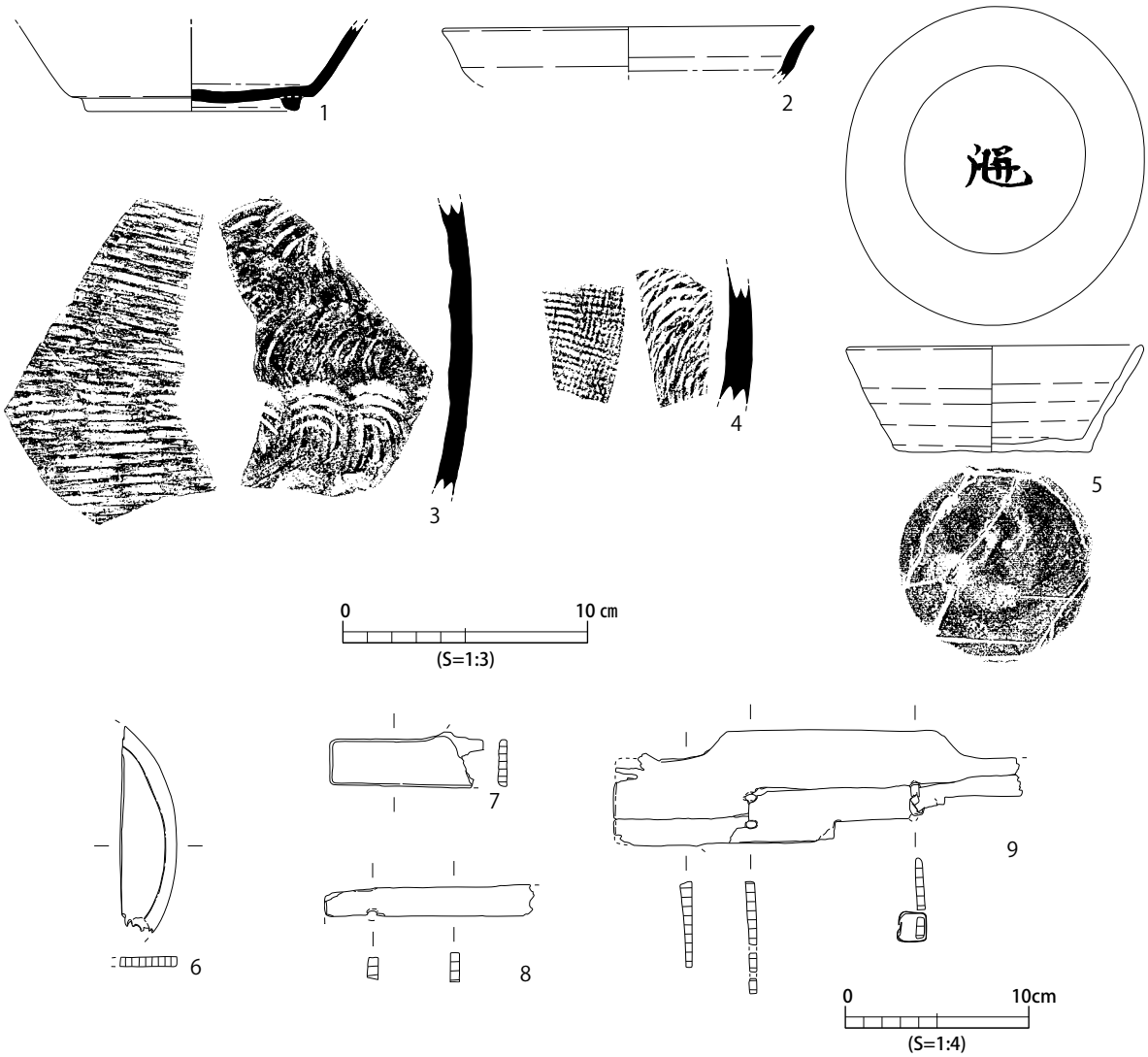
６～９は木製品である。６は曲物の底板とみられるもので、外縁に沿って、弧状に線刻が見られる。７～９は板状の木製品で、１か所でまとまって出土した。９は左右両端側が狭く、中央部が広く作られている。中央部の左右には２孔１対の穿孔があり、一方には桜の樹皮が残っていた。７は端部が方形で幅狭につくられたもの、８は端部付近に穿孔されたもので、９と組み合わせて使用された可能性があるが、どのようなものかは不明である。

４．Ⅳ・Ⅴ層の調査

（１）Ⅴ層上面の検出遺構（第 135 図）

Ⅴ層上面では溝２条、土坑２基、性格不明のピットを検出した。なお、Ⅴ層上面の標高は、調査区東側では 2.2 ～ 2.3 m、西側では 1.7 mで、調査区の中央よりやや東寄りの部分から急に西側へ低くなっている。

SD01（第 139 図）　調査区の北端、Ｆ２・３グリッドに位置し、北側は調査区の周囲に掘った排水溝で切られている。検出できた長さは 6.6 m、幅 0.7 m、深さは 0.1m である。埋土は、黒色粘



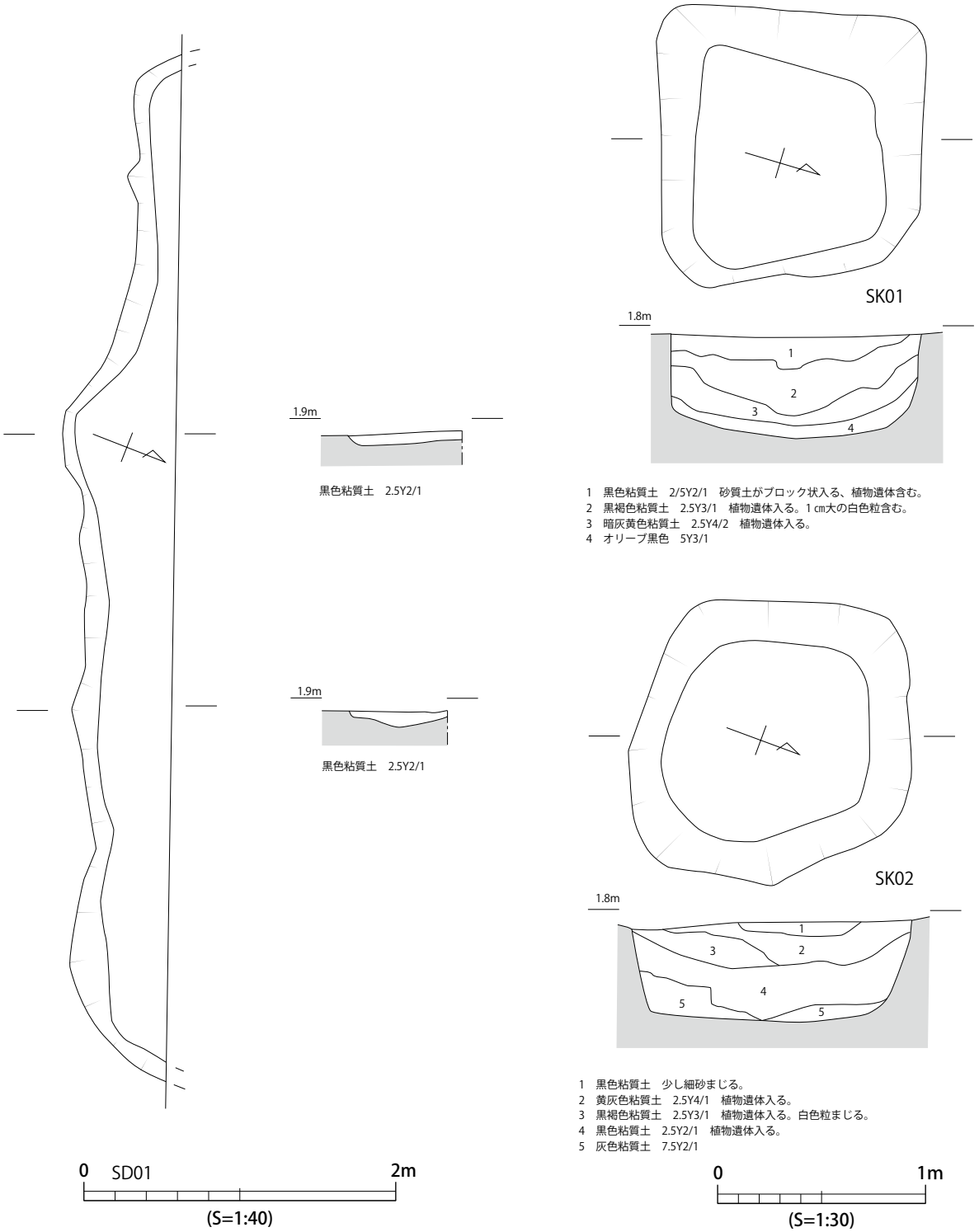
第 138 図　7 区④Ⅲ層出土遺物

質土が堆積している。遺物は出土していないため、時期は不明である。

SK01（第 139 図）　調査区の北西隅付近、Ｆ１グリッドに位置する。1.35m × 1.3m、深さ 0.5m の規模を持つ隅丸方形の土坑である。埋土は４層に分かれるが、１～３層には草本類の植物遺体が入り、２層には基本層序Ⅲ層に含まれる径１㎝大の白色砂質土粒塊も認められた。このことから、この遺構はⅢ層の堆積後に掘削されたと考えられる。遺物が出土していないため、厳密な時期は特定できないが、埋土から古代の遺構とみられる。

SK02（第 139 図）　調査区の北端付近、Ｆ２・３グリッドに位置する。1.36m × 1.36m、深さ 0.5m の規模を持つ隅丸方形の土坑である。埋土は５層に分かれるが、１～４層には草本類の植物遺体が入り、３層には基本層序Ⅲ層に含まれる径１㎝大の白色砂質土粒塊も認められた。このことから、この遺構もⅢ層の堆積後に掘削されたと考えられる。遺物が出土していないため、厳密な時期は特定できないが、埋土から古代の遺構とみられる。遺構の性格については不明であるが、遺構の形状・規模・埋土が SK01 とよく似ていることから、これらはほぼ同時期で、同様の性格を持つ遺構と推測する。

SD02（第 140・141 図）　調査区東側で、Ｅ５・Ｅ６・Ｆ５・Ｆ６グリッドにまたがって南北方向にのびる溝である。南北とも調査区外に続いており、現状で確認できた長さは 10.8 mで、幅 1.5 m、



第 139 図　7 区④ SD01、SK01・02

深さ 0.45 mの規模を持つ。3 か所に土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、また、調査区北壁でも土層の堆積状況を確認した。第 136 図の A-1 ～ 6 がこれに対応する。埋土は 6 ～ 7 層に分かれ、部分的に 0.5 ～ 1㎝大の炭粒を含んでいる。水性堆積した様子はとらえられなかったが、埋土が全体として砂質を帯びていることから、水路として利用された可能性も否定できない。

遺物は古墳時代前期から中期の土器が出土している（第 141 図）。1 は古式土師器の甕で、口縁端部は面取りされている。草田 6 期に位置付けられよう。2 も古式土師器甕で、口縁端部は肥厚し、

屈折部の稜も丸みを帯びており、１よりも新しい様相を示す。３は単純口縁の土師器甕で、口縁部は内湾している。古墳時代中期のものと考えられる。４は古式土師器の高坏で、坏部の底には刺突痕のある円盤が充填されており、時期は古墳時代前期に属する。１・２・４は埋土の中位からやや上部で、３は埋土の上面で出土している。

以上から、この遺構は古墳時代前期以前に掘削され、中期にはほぼ埋没したと考えられる。

（２）Ｖ層掘削段階の検出遺構

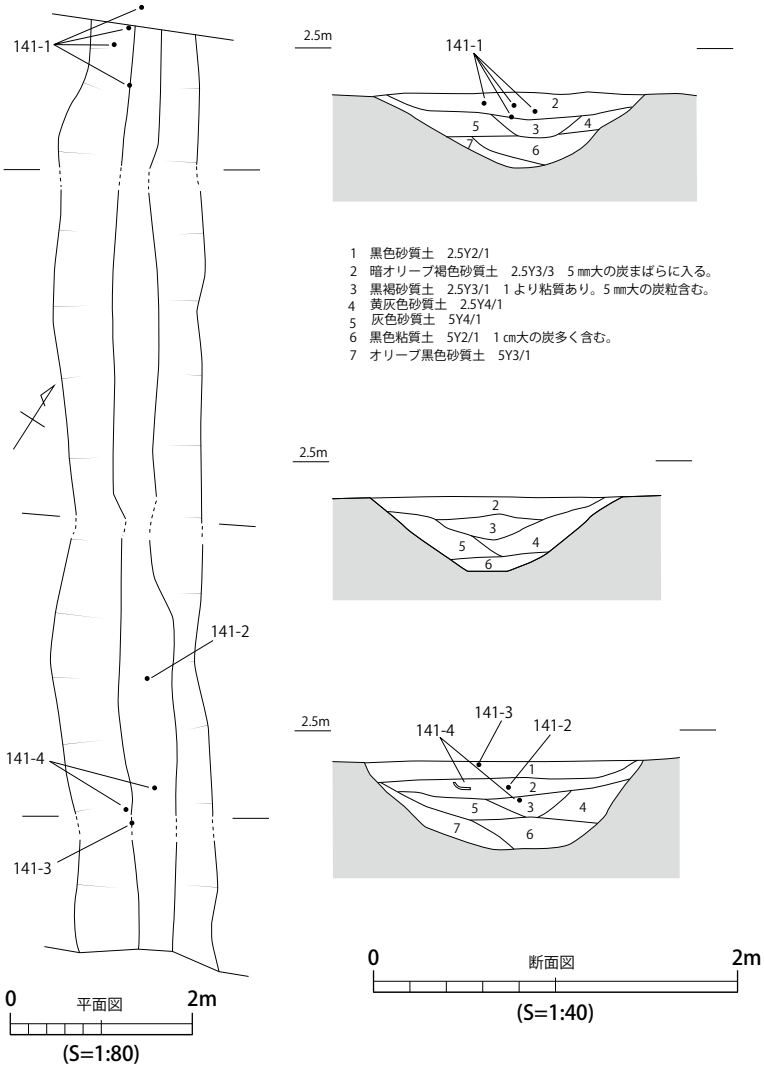
（第 143 図）

前項でもふれたが、Ｖ層上面の遺構調査が終了した時点で、調査区の北壁面の土層を観察したところ、流路と思われるような土層が観察できた。その部分は、SD02 の北側に延長する部分にあたる。土層断面を見る限りＶ層上面に遺構の肩が認められるが、平面的には検出できなかったために、Ｖ層上面を掘削して遺構の平面プランを検出することとし、また、６区①・③・⑤のように下に遺物を含む層がないか、確認することとした。

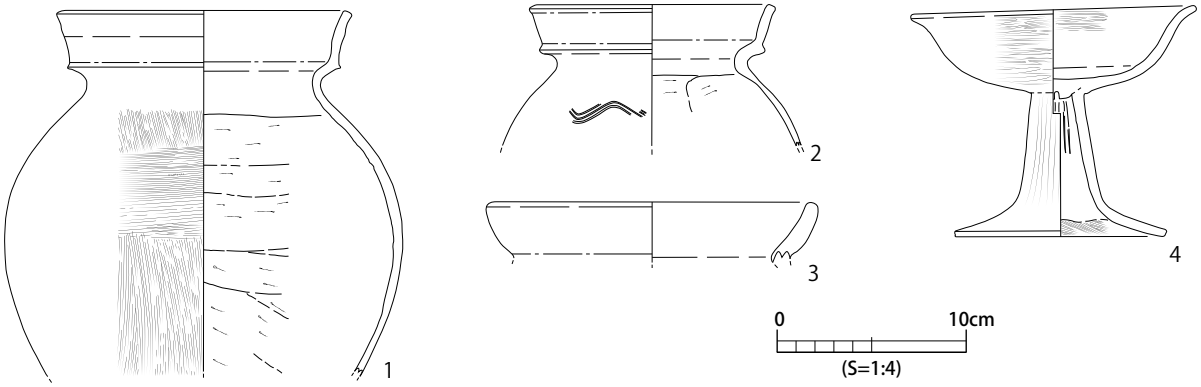
Ｖ層上面から 0.5m 程度掘削したところで、流路跡２条（SR01・02）と溝１条、杭列を検出したが、Ｖ層以下に伴う遺物はほとんどなかった。

SR01（第 143 ～ 145・147 図）

SR01 は、SD02 と重複する位



第 140 図　７区④ SD02



第 141 図　７区④ SD02 出土遺物

置にある流路跡で、平面プランは約３ｍの幅を持って検出された。調査にあたっては、土層観察用をベルト２か所を設定し、また調査区北壁でも土層の堆積状況を確認した（第 136 図 A-A' ライン B -1 ～ 18 層、B-B' ライン C-1 ～ C-16 層）。

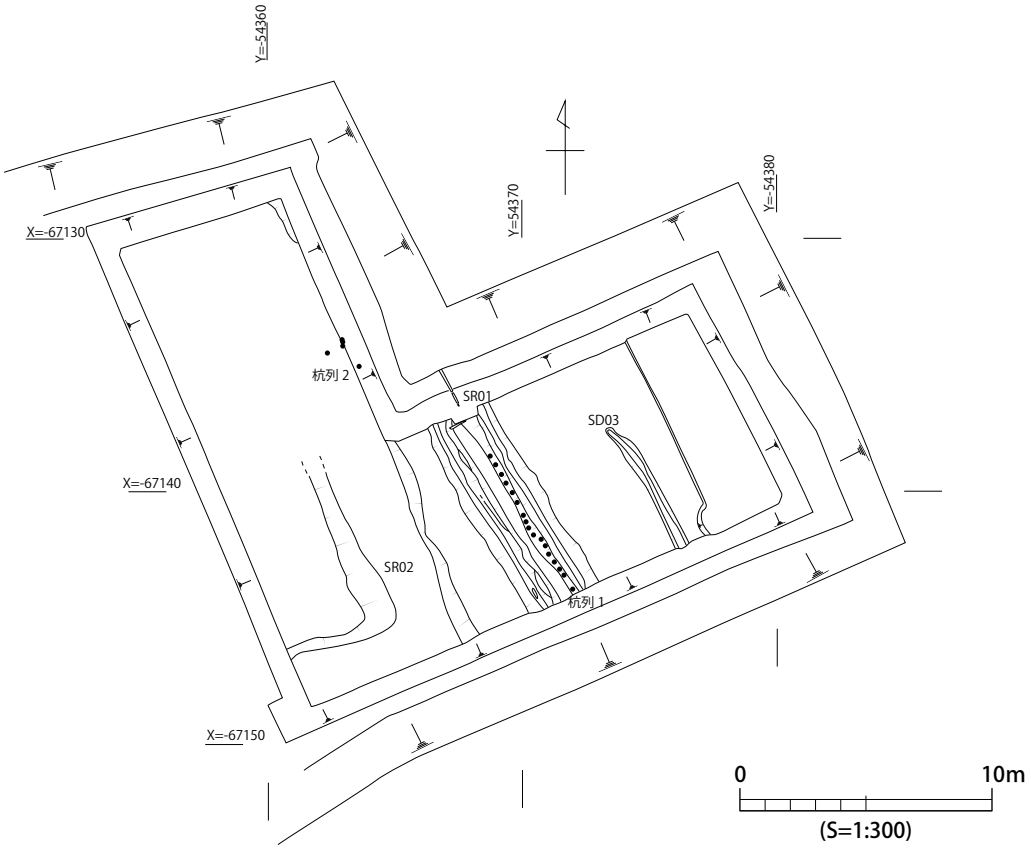
発掘の結果、この遺構は本来は３条の平行する流路であり、土層断面から複数時期の流路が重複していることが明らかになった。もっとも古い段階に中央の流路があり、その東西を切るかたちで２本の流路がのびている。東西の流路の前後関係については、北壁 A-A' ラインの土層から西側流路の方が新しいと判断できる。各流路とも粗砂・細砂などが水性の堆積を示しており、水流があったことが分かる。土層断面で見る限り底面の標高は、南へ行くほど低くなる傾向があることから、北から南へ水が流れていたものと推測する。

西側流路では弥生時代後期後葉～末頃の土器が出土している（第 145 図）。１は甕の口縁部から胴部中位まで残るもので、厚手で無文の複合口縁を持つものである。胴部は縦方向のヘラミガキで調整されている。２は胴部下半から底部が残るもので、体部は縦方向にヘラミガキがなされており、小さいながらも明瞭な平底を持っている。１・２は同一個体の可能性があるもので、口縁部形態や調整の点で、在地で一般的に見られる土器とは異なる印象を受ける。時期は草田３～４期と推測する。

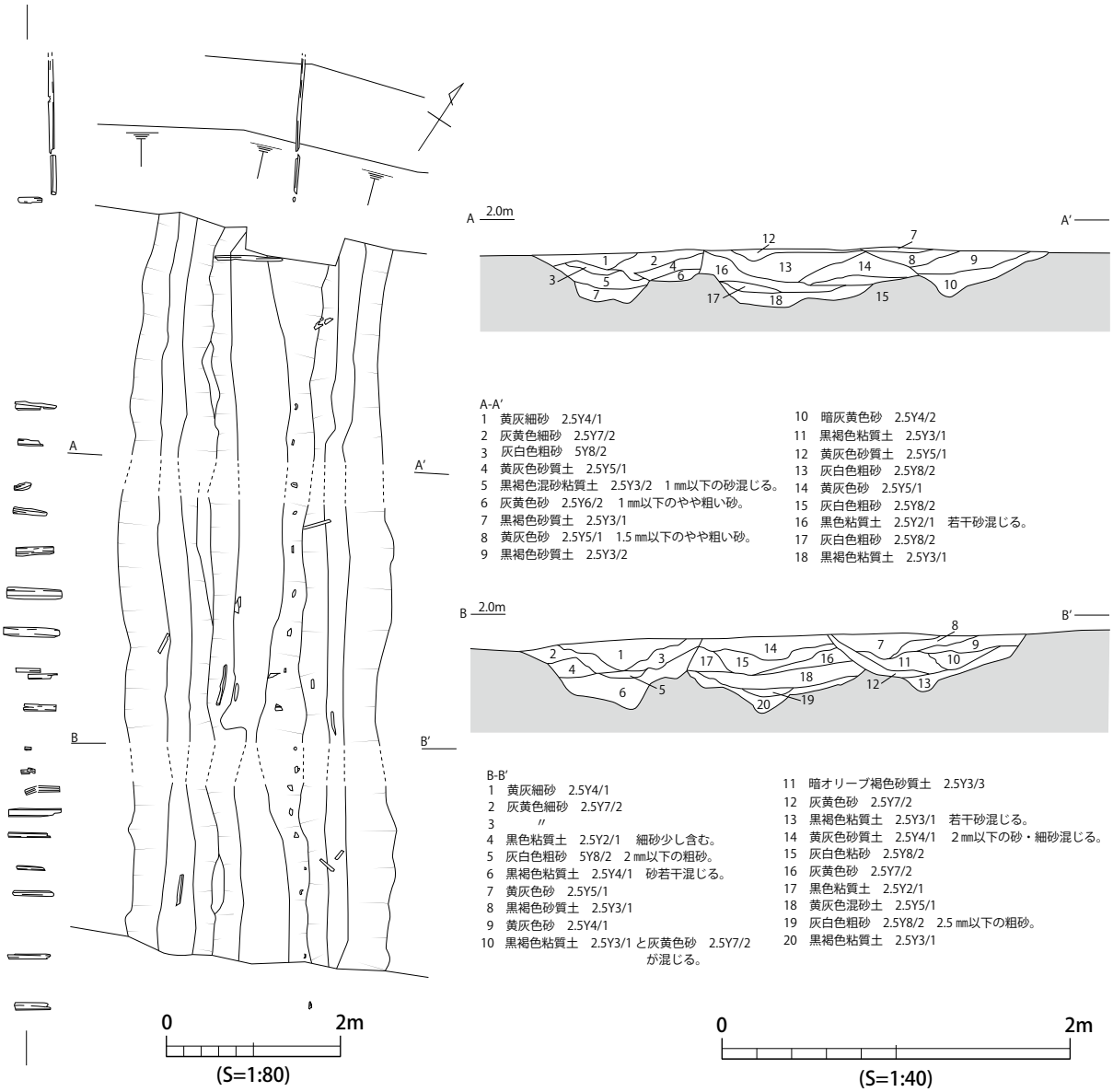
このほか東側流路では、棒状の木製品（第 147 図８）が出土している。

この遺構の時期は、西側流路の土器から、弥生時代後期後葉～末以前と考えられる。

杭列１（第 143・144・147 図） SR01 中央流路の東斜面に並ぶ杭列で、北側ではこの延長上に横わって状態で出土した材があり、これも関連するものかもしれない。



第 142 図　7 区④Ⅴ層掘削範囲



第 143 図　7 区④ SR01，杭列 1

この遺構の性格については、流路に沿って立ち並ぶことから護岸を目的としたものと考える。また、土層の堆積状況から、中央流路に伴うものではなく、東側流路の西側の護岸を意図したもので、SR01 の検出面よりも高いレベルで他の構築材と組み合っており、その後の水流等で上部構造が失われたものと推測する。

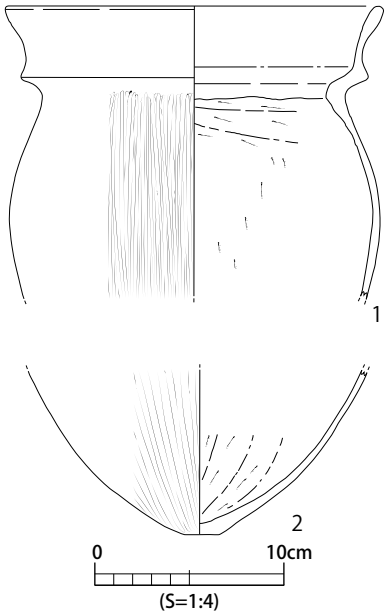
この遺構に用いられた材を第 147 図に図示する。

１は北側で横たわる状態で出土したもので、杭列と組み合わさった構築材の可能性があるものである。現存長 123.4㎝で、左側面に２か所抉りが入っている。

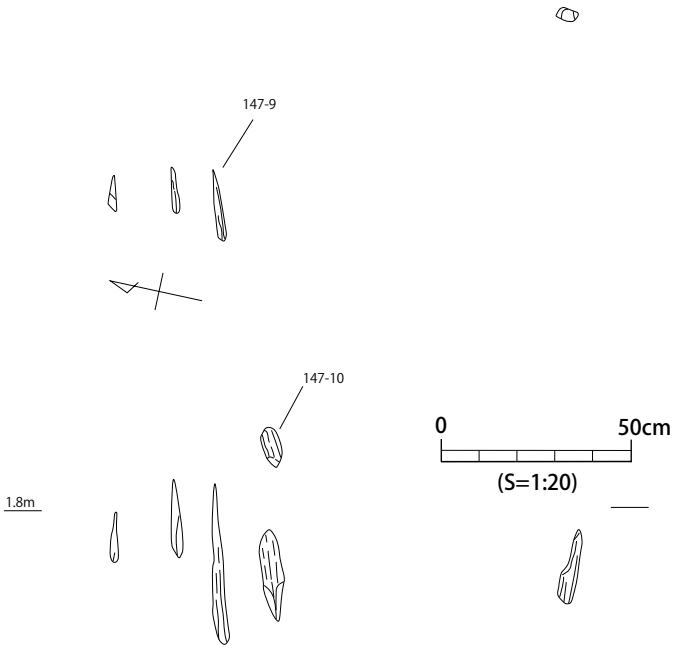
２～７はいずれも杭として用いられたものである。幅５～ 10㎝前後の板状の木材で、先端は粗く割られたままで、特に尖らせたような加工はない。２・４のように別々の杭が接合できたものもある。２～４は板状の部材を転用したもので、長方形の穿孔や円形の小孔を持つ。５～７は、一方の面は工具で丁寧な加工がされ、丸みを持たせるように面取りされているのに対し、もう一方の面は粗く割られたままの状態である。柱のようなものを粗く板状に割って、転用した可能性が考えられる。

145-2
147-2
147-4
147-8
147-3
147-1
147-5
145-1
147-6
147-7
0 木器 40cm
(S=1:16)
0 土器 20cm
(S=1:8)
0 平面図 2m
(S=1:80)

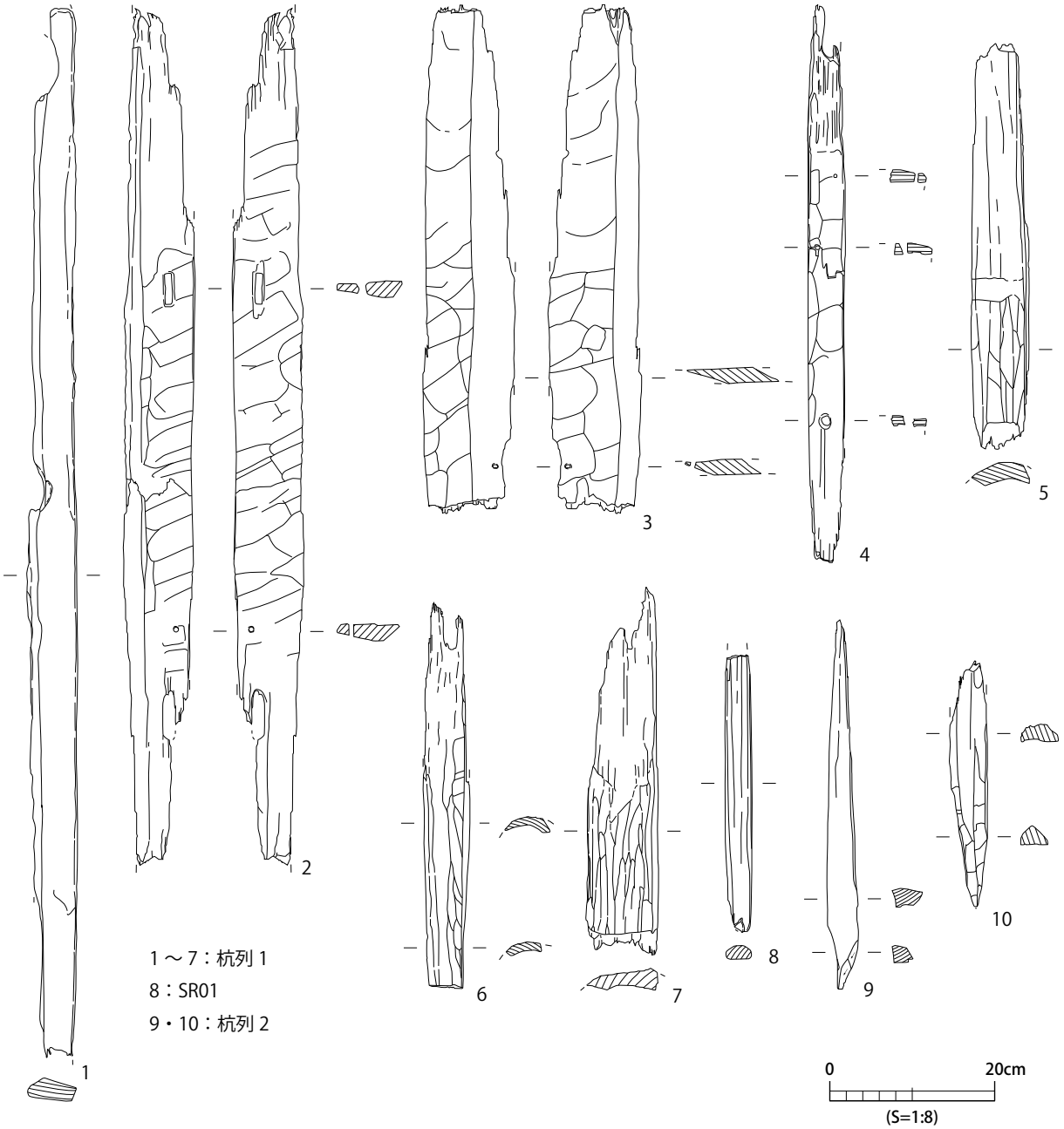
第 144 図　7 区④ SR01，杭列 1 遺物出土状態



第 145 図　7 区④ SR01 出土遺物



第 146 図　7 区④杭列 2



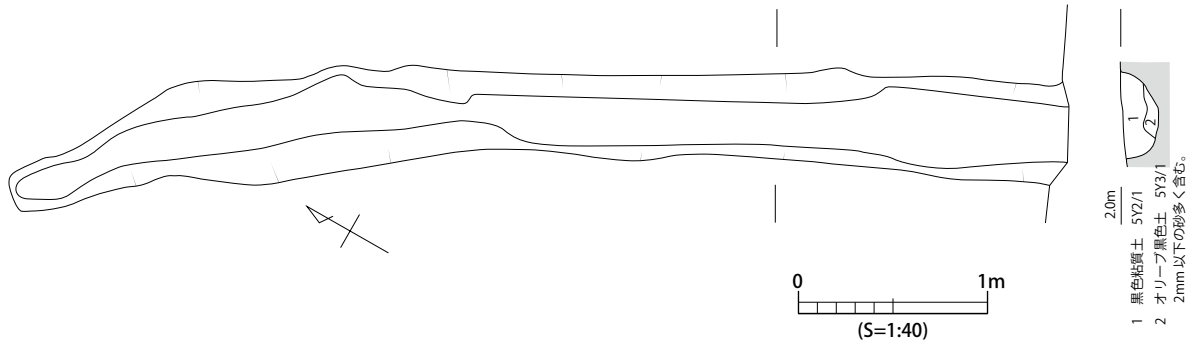
第 147 図　7 区④杭列 1 ・ 2 出土遺物

杭列 2（第 146・147 図）　SR01 の推定西上端のからやや西側で、SR02 の東上端のほぼ延長線上に位置する 5 本の杭で構成される。SR01・02 のいずれかに伴う可能性があるが、判断できない。第 147 図 9・10 はこの杭列に伴うもので、いずれも先端が加工されて尖っている。

SR02（第 148 図）　SR01 から約 2 m 西側で検出された。確認できた長さは約 8 m で、幅は 4 m である。南側は幅が大きく広がるか、L 字状に屈折しているようであるが、調査区外になるため全体の形状は分からない。北側は次第に不明瞭になり、平面的には確認できなかったが、第 136 図 B-B' ラインの D -1 ～ 3 層がこれに対応しそうであり、そうであるとすればⅤ層上面から遺構がはじまっていることになる。遺構の性格は、土層に砂が入ることから流路跡と判断したが、人為的なものか自然によるものかは不明である。遺物は出土していないため、時期は不明である。

SD03（第 149 図）　SR01 から約 3m 東側に位置する、南北方向にのびる溝である。現状で確認できた長さは 5.6m、幅約 0.5m であるが、南側は調査区外にのびている。埋土は 2 層に分かれ、上

第 148 図　7 区④ SR02



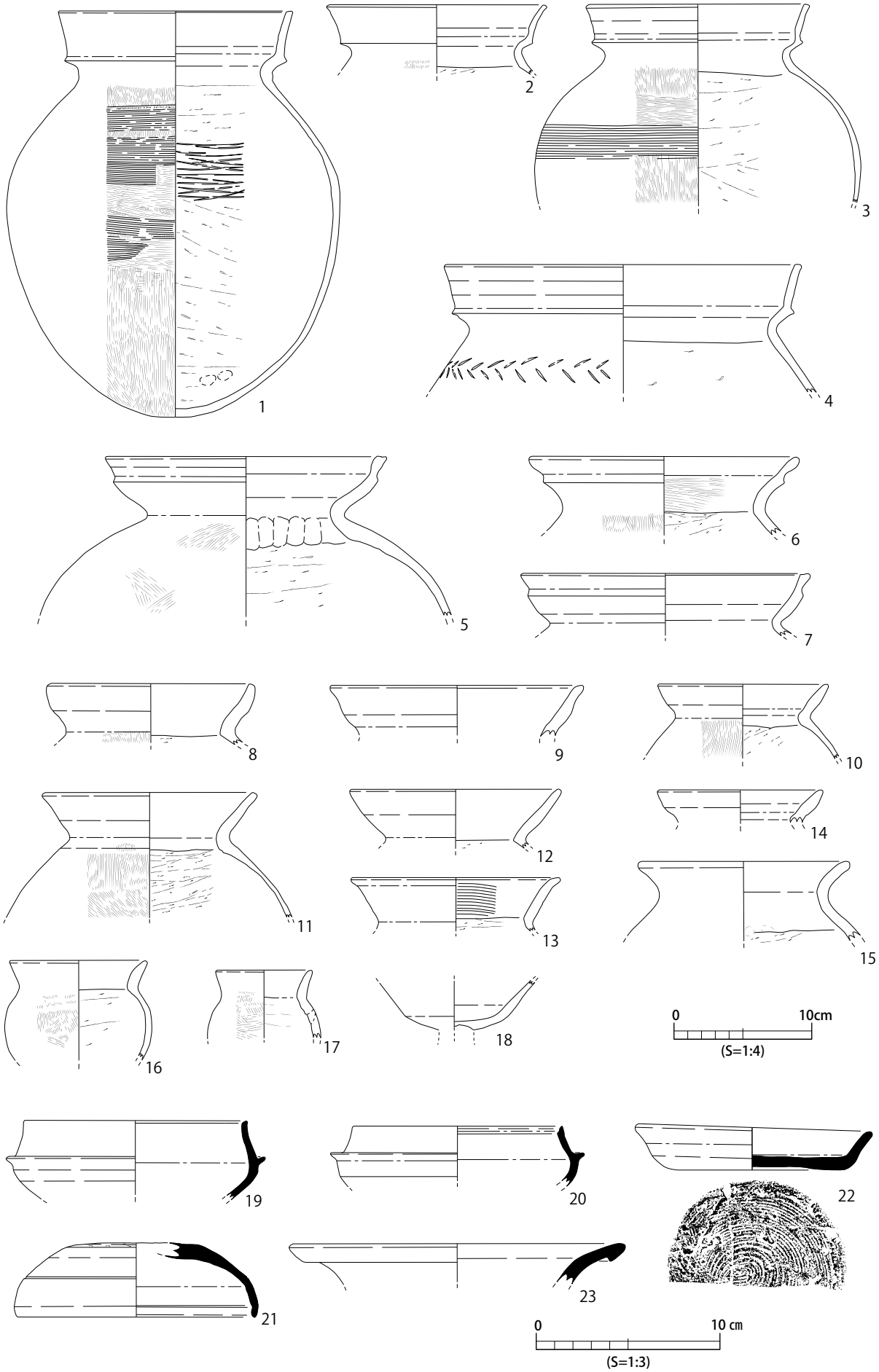
第 149 図　7 区④ SD03

層は黒色粘質土で、下層は砂混じりのオリーブ黒色土で、水性堆積した様子は見られない。遺構の掘り込み面は、調査区南壁に壁面崩落を防ぐ土留めをしていたため、確認できなかった。出土遺物がないため、時期は特定できない。

（3）Ⅳ・Ⅴ層出土遺物（第 150・151 図）

Ⅳ層出土遺物　1 ～ 27 はⅣ層から出土したものである。Ⅳ層では弥生時代後期末頃から古代の遺物が出土しており、とくに古墳時代の遺物が多く見られる。

1 ～ 4 は古式土師器の甕である。1 は倒卵形の体部を持ち、口縁端部は面取りされている。底部は丸底であるが、外面にはハケ目が、内面にはケズリが及んでいる。草田 6 ～ 7 期のものとみられる。2 は口縁部がやや外反し、口縁端部が丸みを持ちながらつまみ出されたもので、草田 6 期のものと考える。3・4 は口縁端部が面取りされ、やや肥厚しているもので、草田 7 期に位置付



第 150 図　7 区④Ⅳ層出土土器

けられよう。

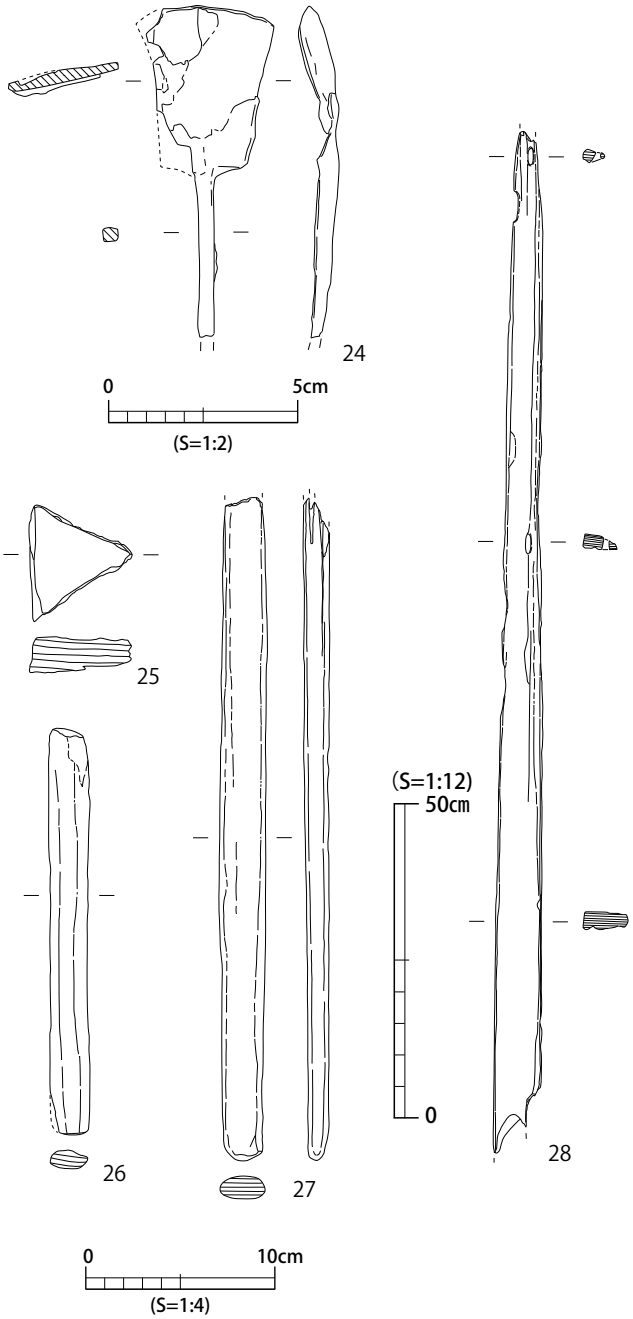
5～14は古墳時代中期の土師器甕である。5～7は退化した複合口縁のもので、11・12は口縁部が内湾気味のもの、8～10・14は複合口縁の退化が進んだものとも、内湾口縁のもののどちらにもとれそうなもので、13は口縁部が外反するものである。15は体部から口縁部の屈曲が緩いもので、古墳時代後期以降に下る可能性もある。

16・17は小型丸底壷の範疇に入るものと考えたが、口縁部が短く、小型の甕とすべきかもしれない。18は高坏で、口縁部と体部の境に稜線が見られる。

19～22は須恵器である。

19・20は蓋坏の身で、19は口縁端部が面取りされ、20は口縁端部に段を持つ。ともに大谷編年の出雲1期まで遡る可能性がある。21は坏蓋で、外面は肩部に1条の沈線が巡り、内面は口縁端部よりも上がったところに沈線が入る。出雲4期に位置付けられよう。22は口縁部が外反して立ち上がる皿で、底部には回転糸切り痕が残る。奈良時代頃のものである。23は瓶もしくは甕の口縁部と考えて図化したが、高坏の脚部になるかもしれない。

24は鉄鏃で、鏃身部は方頭状で、これに断面方形の細長い棒状の茎部が付く。



第151図　7区④Ⅳ・Ⅴ層出土鉄製品・木製品

25～27は木製品である。25は三角形状の板状木製品である。26は棒状の木製品で、断面形は不正楕円形になっている。27は断面形が楕円形の棒状木製品である。先端には割れ目があり、ここに鎌などの刃部をはめ込んで柄として用いたのかもしれない。

Ⅴ層出土遺物　Ⅴ層では、ほとんど遺物が見られなかったが、調査区周囲に掘り込んだ排水溝から木製品（28）が出土した。28は現存長161.7㎝の板状木製品で、右長辺寄りには長径3㎝前後、短径1㎝弱の長楕円形の穿孔が2か所あり、左長側面に抉りが入れられており、何らかの部材と考えられる。